

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成23年11月22日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 京都大学文学研究科

職 名・学 年 博士課程3年

氏 名 小 倉 智 史

助成の種類	平成22年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 在外研究長期助成		
研究課題名	前植民地期カシミールの社会・宗教的動態		
受入機関	Institute of Persian Research, Aligarh Muslim Univerisity, INDIA		
渡航期間	平成22年11月21日 ～ 平成23年11月1日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	2,550,000円	
	使用した助成金額	2,550,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	旅費	150,000円
		滞在費	2,400,000円
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)		

## 成果の概要

平成 22 年度長期派遣助成 小倉智史

研究課題：前植民地期カシミールの社会・宗教的動態

報告者は平成 22 年度長期派遣助成を受け、インドのアリーガル・ムスリム大学ペルシア語研究所にて研究を行った。凡そ南アジア史を研究を遂行しようとする場合、資料の刊行状況や現地図書館の利用状況に鑑みて、現地に長期間滞在することが必須であるが、貴財団の助成によって充実した研究活動を行うことができた。貴財団に心からの謝意を表すると共に、ここに研究成果の概要を報告する。

報告者は前植民地期カシミールの社会・宗教的動態を明らかにするため、主に非ムスリムが著したサンスクリット語史料と、ムスリムが著したアラビア語・ペルシア語史料に基づいて研究を行なっている。具体的には、以下の四点に特に着目している。①当該地域において住民の間にイスラームはどのように浸透していったのか、②支配者であったムスリムは当該地域の伝統文化、宗教をどのように理解して、対応を図ったのか、③ヒンドゥー教等伝統宗教に属していた者は、イスラームをどのように解釈したのか、④当該地域において支配者のレジティマシーはどのように主張されて、どのように理解されたのか、である。

受け入れ機関であるアリーガル大学ペルシア語研究所では、報告者は **Visiting Researcher** のポジションにあり、専ら大学の中央図書館 (**Maulana Azad Library**)、及び歴史学部図書館に通って、所蔵されているペルシア語写本の調査に務めた。前者は約一万四千点の写本を、後者は百数十点の写本を有しているが、現在写本を電子複製することは許可されていない。そのため自ら写本の書写を行った。加えて日本では入手困難な先行研究の収集も行った。

また、滞在中にインドの他の都市にある図書館も訪れて文献の調査・収集に務めた。デリーのジャーミア・ミッリーア図書館、デリー大学図書館、ヌール・マイクロフィルム・センター、コルカタのアジア協会、国立図書館、ラーンプルのラザー図書館、ハイダラーバードのアーンドラ・プラデーシュ州政府東洋学写本館、サーラル・ジャング博物館である。報告者が訪れた図書館については、今後他の研究者がインドを訪れた際の便宜をはかるため、利用案内を作成して、ウェブ上にアップした。

(URL:<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/w-asia/southasia.html>)

アリーガルで報告者が最初に行ったのは文献研究である。カシミールに成立した最初のムスリム王朝、シャー・ミール朝 (1339~1561) の統治下に成立したサンスクリット語の歴史叙事詩と、ムガル帝国 (1526~1858) 統治下に成立したペルシア語の年代記群は、それぞれの著者たちの言語も宗教も異なっていたために、一見無関係に成立したものにみえる。しかし両者のテキストを精読すると、両者の間には参照関係があった痕跡が認められる。こ

の点は既に先行研究で指摘されていたが、両言語を扱える研究者が文献群を網羅的に調査したことはこれまでになかった。そこで報告者はこれまでに入手していた刊本、イギリスやドイツから取り寄せていた写本に加えて、インド国内で収集したペルシア語写本全てに書かれている情報を逐一精査した。それによって、15世紀半ばから17世紀第一四半期までに成立した、サンスクリット語、ペルシア語史料群における歴史情報の伝承経路を復元することができた。この歴史情報の伝承には、ムガル帝国第三代皇帝アクバル、及び第四代皇帝ジャハーンギールが行わせた、サンスクリット文献のペルシア語への翻訳活動の貢献が認められる。報告者はこの成果を *Journal of Indological Studies* に投稿し、掲載が許可された (Satoshi OGURA, *Transmission Lines of Historical Information on Kashmir: from Rajatarangini to Persian chronicles in the Early Mughal period*, *Journal of Indological Studies*, 22&23, pp. 23-59)。拙稿を載せる当該誌の最新号は間もなく刊行される。またこの文献研究によって、一連の文献それぞれの史料価値を明らかにすることができた。歴史研究において、その史料となる文献の検討を行うことは最も基本的かつ必須の作業であり、今後研究を遂行するにあたっての基礎を固めることができたと言えることができる。

報告者が次に行ったのは、上に挙げた四つの着目点のうち第三点をあきらかにすることである。ムスリム統治下にバラモンたちが支配者層たるムスリム、および彼らの宗教であるイスラームをどのように解釈していたかを、彼らが著したサンスクリット語の叙事詩の中に現れる、ムスリムを表象する語を抽出し、各々の用例を文脈に即して検討した。この作業の結果明らかになったことは、ムスリム統治下のカシミールのバラモンたちは、イスラームをサンスクリット語で「哲学」や「思想」を意味する「ダルシャナ」というタームを用いて表象していることである。特に葬送儀礼や牛の扱いをめぐって、バラモンたち自身が信じる「ダルシャナ」と、ムスリムたちの「ダルシャナ」の差異が強く意識されている。先行研究においては、非ムスリムはムスリムを伝統的なカースト体系の外側に位置する集団として捉えるか、あるいはイスラームという宗教ではなく、イラン系、トルコ系といった民族的な属性を表象するというのが通説とされてきた。しかし本研究で明らかになったカシミールの事例は従来の理解とは異なるものである。十六世紀のベンガル地方では、非ムスリムによって著されたベンガル語文献の中で、「ヒンドゥー」と「ムスリム」が宗教的差異に基づいて表象されているとする研究があるが、このカシミールのサンスクリット語叙事詩に現れる「ダルシャナ」の用例もまた、ヒンドゥーとイスラームの宗教的差異を当時の非ムスリムが意識していた証拠とすることができる。カシミールとベンガルは現在南アジアの中で共にムスリムがマジョリティとなっている地域であり、そのような地域でともに非ムスリムがヒンドゥーとイスラームの宗教的差異を意識するようになるという共通点を見いだせることは興味深い。この成果については、来年一月にデリーで開かれる第15回国際サンスクリット学会にて口頭発表を行う予定である。

この一年間に明らかになった研究成果は、いずれも博士論文の一部として重要な位置を占めるものである。また、インドで得た写本の電子複写や手書きによるコピー、先行研究なども、博士論文の執筆に活用される。